日文教育資料［図画工作・美術］

形

No.296-2011

Forme

平成 24 年度用 新版「美術」

教科書特集号

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

形 Forme
No.296-2011

『美術 2・3 上』p.7 より「つながる道」

『美術 1』p.21 より
「ユニバーサルデザインのレポート」

『美術 2・3 下』p.20 より
「チャリンコモンスター」

『美術 2・3 下』p.5 より

contents

〔特集〕平成 24 年度用　新版「美術」教科書

巻頭言

美術の教科書との出会い　春日 明夫　3

新版教科書のコンセプト

「生きる力」を育む美術の学び　大橋 功　4-7

新版教科書 Q&A　8-11

美術の授業と教科書

さまざまな場面で活用できる美術の教科書を目指して　小泉 薫　12-13

教科書の使い方のポイント　14-15

内容解説

個に軸を置く美術の学びとは　小澤 基弘　16

題材事例　15 の肖像　田中 晃　17

身の回りや生活に関わる美術の学びとは　鉄矢 悦朗　18

題材事例　ユニバーサルデザインを考える　藪 陽介　19

社会や世界につながる美術の学びとは　岡本 康明　20

題材事例　廃材アート―廃材に新たな命を吹き込もう―　中平 千尋　21

自然や生命，環境に関わる美術の学びとは　泉谷 淑夫　22

題材事例　想像の動物の形を打ち出そう ―銅板レリーフ―　中村 みどり　23

教師用指導書のご案内　24-25

平成 24 年度用　新版「美術」 題材一覧　26

巻頭言

美術の教科書との出会い

東京造形大学　教授　春日 明夫

教科書とは，文部科学省の「教科用図書検定基準」に合致した教科用図書であり，この合格検定は学習指導要領に準拠していることは今更言うまでもない。したがって，その編集作業にも多くの制約が伴う。しかし，一般の人や多くの教師たちもその制度や制約の内容についてはほとんど知らない。かつての私もその一人であった。教育課程の改訂とともに新学習指導要領が公示され，新しい教科書が発行されるたびに素朴な疑問を持った。「どうして美術の教科書はページ数が少ないのだろうか。内容も堅すぎるし，紙面構成に面白みがない。アカデミックな作品ばかりで，少しは現代的な作品や題材を載せればよいのに。こんな題材はうちの学校ではレベルが高すぎて授業にならないよ」等々。そして，私は次のようにも言い張った。「授業で教科書はほとんど使いません。使ったとしても年度初めにざっと中身を見て確認する程度です」･･･。

しかし，最近，新しい教科書に載るクロード・モネの油絵「睡蓮」を何気なく見ていた時，私は中学 1 年生の頃を思い出した。それは，ある教育雑誌のオマケに付いていたモネやゴッホの複製画，お茶づけ海苔の中に入っていた東海道五十三次の浮世絵を一生懸命に集めていたことである。そして，集めていた複製画と同じ作品を美術の教科書の中で発見した時，何とも言えない不思議な充実感を感じた。続いて，高校生の時に国立西洋美術館やブリヂストン美術館でセザンヌやモネの本物の作品を見た時のことを思い出した。その瞬間，私は友人にこう叫んだ。「この絵，持っているよ」。友人が妙な顔をしたので即座に言い直した。「美術の教科書の絵だよ」･･･。

今思えば，私に美術の素晴らしさや，ものを見ることの大切さを教えてくれたのは，実は中学校の美術の教科書だったのかもしれない。私と美術の教科書との出会いが，思春期の多感な気持ちを和らげ，感受性を豊かにし，時には疑いの目で事物を見る，そんな人間的な気持ちを育ててくれたのである。私は，少年時代の自分自身を思い起こしながら，あまりにも知識や先入観で物事を判断し，素直な気持ちでものを見ることができなくなった自分を反省した。

つまり，美術の教科書の使命は，ただ単に教科内容を紹介するためにスマートにデザインされたカタログ的な図書ではない。生徒たちが今を，そして将来を生き抜くために，その糧の一つとなるような内容と紙面構成が重要である。それは人間らしく生き，夢や見通しを持って生活し，いったい何が真実なのかを見極めるための審美眼を育てる，このような目標や内容が明確に示された教科書こそ素晴らしい教科書と言える。

『美術 1』p.40-41「光の美しさを求めて」より
クロード・モネ「睡蓮・緑の反映」（部分）　1916-26 年

新版教科書のコンセプト

「生きる力」を育む美術の学び

岡山大学　准教授　大橋 功

はじめに

デジタル化やグローバル化が進み，さまざまな国や地域の文化がインターネットや映像メディアを通じて自由に行き交う時代。中学生を取り巻く環境も急速に移り変わっています。それにともない，美術の学習環境や学習活動，学習ツール，さらには小中連携，言語活動の充実，情報化社会における美術の役割，社会における美術の働きなど，扱うべき学習内容も多様化しています。

授業時数が削減される一方で，扱うべき内容や課題が増大している状況の下，「これからの美術教育にはどのような視点や方法が必要なのか」。新学習指導要領の改訂の要点を読み解きつつ，こうした問いへの答えを探ることが，今回の新しい教科書づくりの出発点となりました。

そして，私たちが答えるべきもう一つの問いがあります。

「美術を学ぶことの意味は何ですか？」

美術を学ぶことの意味，それは絵を描いたり，ものをつくったりするための知識や技術を身につけることにとどまらず，失敗を恐れずに試行錯誤したり，あれこれと思いをめぐらせながらつくり出していく創造的なプロセスの中に見出せます。美術を通して中学生が自分自身を知り，他者を理解し，社会を体験していくこと，その中で感じることや表現することを「生きる力」につなげていくことが，何より大切です。具体的には，イメージする力，伝え合う力，感じ取る力，創造的に問題を解決する力などがあるでしょう。生きていく上で欠かせないたくさんの力を引き出し，豊かな人間性を育むことをしっかり実感できるようにしたいと考えました。

美術とのよりよい出会いを導く教科書。発想や構想の引き出しがいっぱい詰まった教科書。育みたい能力の獲得を確実に支援できる教科書。そして何よりも，中学生の成長に寄り添った学びをデザインできる教科書。私たちの新しい教科書に対するイメージは次第に定まっていきました。

活動内容から培うべき能力へ
―新学習指導要領の新たな枠組み

これまでの学習指導要領では，「A 表現」を「(1) 絵や彫刻などに表現する活動」，「(2) デザインや工芸などに表現する活動」という，活動内容による 2 項目で示してきました。新学習指導要領では，「(1) 感じ取ったことや考えたことなどを基に，発想や構想する力」「(2) 伝える，使うなどの目的や機能を考え，発想や構想する力」という「発想や構想の能力」による分類で示すとともに，「(3) 形，色彩，材料を使い，描いたりつくったりする技能」という「創造的な技能」に関わる項目を新たに分離させ，3 項目に分けて示しています（図 1）。

このように「創造的な技能」に関して別項目で示したこと以外には，新旧ともに (1) は「絵や彫刻などに表現する活動」，(2) は「デザインや工芸などに表現する活動」であり，分類は同じであるかのように感じられます。しかし，これまでは美術の領域における活動内容のみで示してきたものを，新学習指導要領では，「発想や構想の能力」「創造的な技能」というように，発揮させ，獲得させるべき力という視点から示していることが分かります。

また，大切なのは，「A 表現」と「B 鑑賞」が相互に関連し合うものであり，「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」が相乗効果を持って獲得されるものであるという視点です。誤解を恐れず大胆な解釈をするならば，「A 表現」「B 鑑賞」と区別された分野や領域を前提にするのではなく，どちらも造形的な創造活動の両側面に過ぎないのであり，むしろこれらは，美術で獲得させるべき能力，つまり「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」という能力形成の視点へと溶解し融合すると考えられるのです。

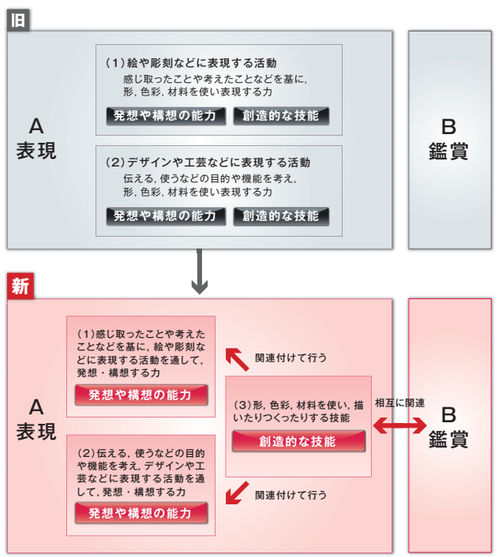


図 1 . 新学習指導要領の枠組み

「領域」から「テーマ」へ

新学習指導要領を読み解きながら新しい教科書づくりを検討する中で，上記のように「A 表現」「B 鑑賞」というくくりや，「A 表現」の中に見られた「絵」「彫刻」「デザイン」「工芸」という表現領域だけではなく，「美術の学びで育まれる力が，『生きる力』につながっていくプロセス」という視点から，題材設定や教科書の骨組みを見直すことにしました。そこで，これまで教科書で表現領域ごとに扱ってきた題材を，いったんバラバラにし，別の視点からの再構成を試みました。それが，次の 4 つのテーマです。

❶個に軸を置くテーマ

自らを見つめ，自らを表現し，自分らしさやそのよさに気づくとともに，個性的な表現を通して，一人一人の違いとそのよさに気づくことができる。

❷身の回りや生活に関わるテーマ

身近にある造形や美術に関心を持ち，生活を美しく豊かにする美術の働きに気づくとともに，身

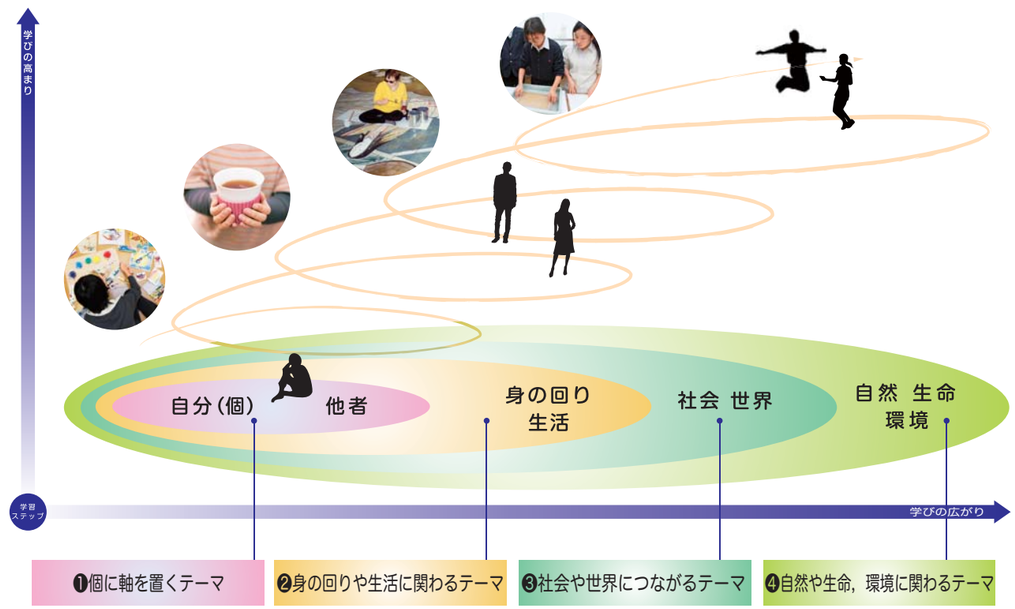


図 2. 発達段階とともに広がる中学生の世界観

の回りや生活の中で見つけた主題を表現したり，よりよい生活を美的に創造したりする態度と能力を養う。

❸社会や世界につながるテーマ

自分たちが生きている社会や世界に目を向け，形や色彩による創造的なコミュニケーションなどを通して，豊かに社会と積極的に関わる態度を育み，よりよい社会を展望し，その創造につながる態度と能力を培う。

❹自然や生命，環境に関わるテーマ

自然の美しさや偉大さなどに心を向け，それらとの命のつながりや環境の大切さを感じ取り，新しい関わりを模索することを通して，自然や生命，環境を大切にしようとする心情を培う。

これら 4 つのテーマは，思春期にある中学生が世界観を広げながら自己を確立していく精神発達のプロセスに対応しています。4 つのテーマに基づく題材は，1 ～ 3 年の各学習ステップの中にバランスよく配置され，個から身の回りや生活へ，生活から社会や世界へ，さらに自然・生命・環境へと円環的に広がる学びの体験を促しながら，より高度な表現や鑑賞の次元へ学びを導いていきます（図 2）。

楽しく魅力的な学びが広がる紙面

第 1 学年用教科書（『美術 1　美術との出会い』）では，小学校から中学校への連携をキーワードとした序章に始まり，主に［Ⅰみる・感じる・つくる］は「個に軸を置くテーマ」，［Ⅱ生きる豊かさ　伝え合う楽しさ］は「身の回りや生活に関わるテーマ」，［Ⅲ世界の広がり・歴史の奥行き］は「社会や世界につながるテーマ」として，中学校での美術の学びをスムーズに導きつつ，全テーマにわたり世界観を広げていく基礎づくりに重点を置いた構成にしました。

次に，第 2・3 学年用教科書上巻（『美術 2・3 上　生活の中に生きる美術』では，主に［Ⅰ「つながり」のかたち］は「個に軸を置くテーマ」，［Ⅱ「生きる」かたち］と［Ⅲ「伝え合う」かたち］は，「身の回りや生活に関わるテーマ」として，段階的に高まっていくように構成しています。

第 2・3 学年用教科書下巻（『美術 2・3 下　社会に広がる美術』）では，主に［Ⅰイメージの力］は「個に軸を置くテーマ」，［Ⅱ社会の中で］，［Ⅲ文化受けつぎ・つくる］は，「社会や世界につながるテーマ」として段階的に展開しています。そして，全体にわたって，「自然や生命，環境に関わるテーマ」を織り込んでいます。

このように，第 2・3 学年の上巻・下巻の 2 分冊は，「表現」と「鑑賞」あるいは，「絵や彫刻などに表現する活動」と「デザインや工芸などに表現する活動」のような分野や領域で分ける考え方ではなく，美術で育てるべき力と，成長に寄りそうテーマに軸を置いた新しい考え方で構成したものです（図 3）。

また，中学生が主体的に知識や技能を広げていけるよう，これまで以上に多彩な話題や関連する題材を豊富に掲載しました。この教科書のページを開くごとに，先生も生徒も楽しく興味を持ちながら授業が進められます。多様化する美術で取り組むべき課題に対応し，「生きる力」を育む美術の学びをサポートするために，選択肢に富んだ紙面づくりを心がけました。

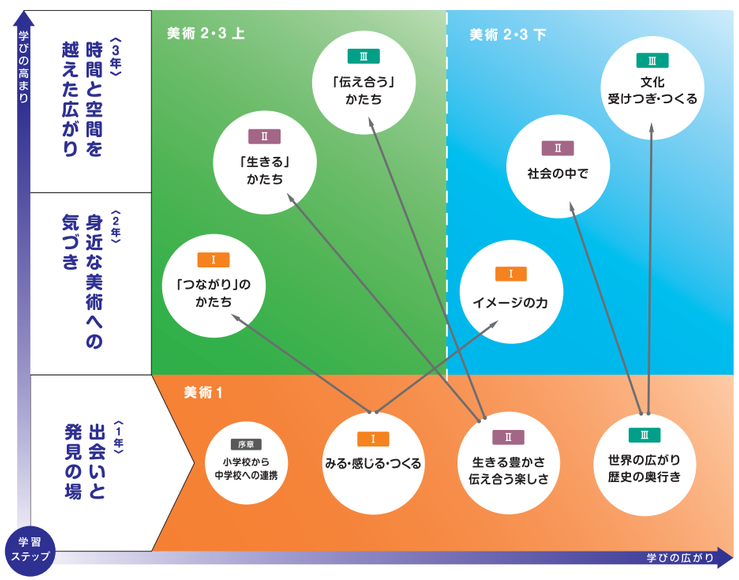
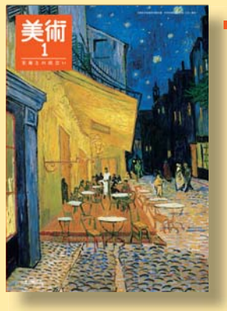


図 3. 3 年間の学習ステップと教科書の基本構成

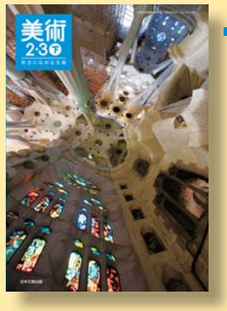


美術 1
感じることから始めて，
美術との出会いや発見の場を広げます。

序章 感じる心があるから	小学校から中学校への連結
Ⅰ みる・感じる・つくる	見たり触れたりして感じ取ったことを，自由に表現できる力を育てます。
Ⅱ 生きる豊かさ・伝え合う楽しさ	身近な生活の中で，美術の働きに気づく視点と構想を練る力を育てます。
Ⅲ 世界の広がり・歴史の奥行き	空間的，時間的な想像力を働かせ，視野を広げていく力を育てます。

美術 2・3 上
身近な美術への気づきを通して，
自分を知り，生き方を学びます。

Ⅰ「つながり」のかたち	自分を知り，他者とのつながりを感じ，自己を表現できる力を育てます。
Ⅱ「生きる」かたち	デザインや工芸などを通して，生きることと表現には深いつながりがあることを学びます。
Ⅲ「伝え合う」かたち	美術で学ぶ伝え合う工夫が，中学生の言語力とコミュニケーション力を充実させます。



美術 2・3 下
時間と空間を越えて，
社会や世界に広がる美術を体験します。

Ⅰ イメージの力	イメージを表すことを体験し，美術を通して社会に働きかける力を育みます。
Ⅱ 社会の中で	美術における表現する力と，社会や環境との関係性を考えます。
Ⅲ 文化 受けつぎ・つくる	日本と世界の文化を知り，未来にひらかれた柔軟な視野を身につけます。

新版教科書 Q&A

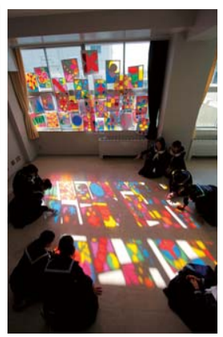
新しい日文の教科書には，新学習指導要領の考え方や，美術の授業で取り組んでいくべき課題を具体化するために必要な数々の工夫が凝らされています。それはまた，生徒の主体的な学びをひらいていくための工夫でもあります。これらの特徴を効果的に生かして授業を展開していくために，どのような点に着目していけばよいのか，ここではＱ＆Ａ形式で解説します。

Q1 小中連携をスムーズに図るための手がかりは？

A1 感覚を働かせる活動から始まる自然な流れが工夫されています。

中学校に入学して初めに手にする『美術１』では，特に小学校からのつながりに配慮した「序章」（p.4-7）を設けました。「図画工作から美術へ」というメッセージでは，図画工作の延長線上に美術の学びがあることを伝えています。そして，視覚だけでなく，直に触れたり，香りを感じたりと，多様な感覚を働かせて感じることから始めます。さらに，自然や身近な世界に目を向け，そこから感じ取った「美しさ」や「面白さ」から引き出されるイメージを出発点に，まずは手を動かすことから始める題材「感じたことをそのままに」（p.8-9）へと自然な流れができるように工夫しています。

『美術１』p.4「木の温もりを感じて」



p.7「光の美しさに魅せられて」

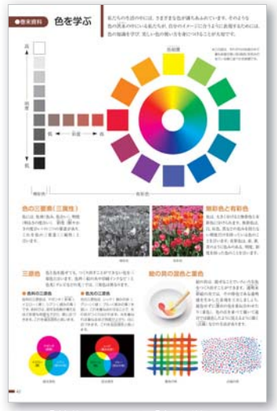
p.9「見たり触れたりしたことを自由に表そう」

Q2〔共通事項〕は授業の中でどのように扱えばよいのでしょうか？

A2 主文や「序章」のページ，巻末資料を通して自然に扱うことができます。

〔共通事項〕は，3 学年通して「ア．形や色彩，材料，光などの性質や，それらがもたらす感情を理解すること」「イ．形や色彩の特徴などを基に，対象のイメージをとらえること」の 2 項目で示されています。教科書では，どのような〔共通事項〕と関連しているのか，すべてのページの主文で触れるようにしています。

さらに，〔共通事項〕を基盤として小学校との連携をふまえた『美術１』の「序章」（p.4-7）や，折込みページを広げることで各題材の学習に参照できる巻末資料（p.42-44）を用意するなど，すべての題材での学習に〔共通事項〕が自然に反映されるように工夫されています。



『美術１』p.42「色を学ぶ」

Q3 日本の美術や伝統と文化のよさを味わう活動とは？

A3 例えば，日本の美意識を学ぶ活動などが挙げられます。

風土や自然に合った日本独自の生活文化は，現代の中学生の生活にも息づいています。四季の移り変わりの中で行われる伝統的な行事には，日本の色彩感覚や自然の材料を用いたさまざまな用具や場面があります。また，「和風」を意識して，生活の中で実際に使われている日用品や和室のしつらいなどに目を向けると，伝統的な工芸品が今も使用されていることに気づきます。それらのデザインや模様には，自然の草花や生き物が題材となっていたり，自然の素材の特徴を生かしていたりすることが多くあります。

新版教科書では，こうした伝統工芸品のよさや美しさを味わい，自然と一体化した日本の美意識に理解を深め，愛着を持つことにつながる題材を掲載しています。

『美術２・３上』
p.22-25「日本の美意識」

Q4 評価についての手がかりは？

A4 評価との関連を考えて，「学びのねらい」で 3 観点を示しています。

教科書では，テーマごとに「学びのねらい」を示しています。
美術の授業を通して，多くのことを学んでいきましょう。

- ● …… 発想・構想に関する学びのねらい
- ◆ …… 創造的な技能に関する学びのねらい
- ■ …… 鑑賞（かんしょう）することに関する学びのねらい

『美術 1』『美術 2・3 上』『美術 2・3 下』p.3 より

学びのねらい

- ● 木肌（きはだ）や木目の美しさなどを生かした表現の構想を練ろう。
- ◆ 表現意図に応じて加工方法を考え，見通しを持って表現しよう。
- ■ 生活を美しく豊かなものにする，木工芸のよさを味わおう。

『美術 1』p.28-29「手でつくる心」より

各ページのテーマごとに示されている「学びのねらい」は，評価の観点である「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」との関連を考えて示されています。この「学びのねらい」は，指導者にとっては，それぞれのページに示されているテーマに共通した「指導のねらい」として捉えることができます。テーマごとの一つ一つの題材との関連も考えて，どのような活動から，どのような生徒の資質や能力を育成するものなのかが簡潔に示されています。また生徒にとっては「学習の目標」となるものであり，評価の観点として示すことができます。

なぜ「学びのねらい」が 4 観点ではなく 3 観点なのかについて

上述のように，「学びのねらい」は評価との関連を考えて示されていますが，「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」の 3 観点については，学習指導要領で求められている「生きる力」を育むための重要な要素としての「思考力」「判断力」「表現力」などの身につけるべき力について，美術科の観点から示しています。本来，美術科の指導計画は地域や学校，生徒の実態に応じて各学校の創意工夫を生かして作成されるものでなければなりません。特に評価の観点の一つである「美術への関心・意欲・態度」については，テーマごとに実際の指導者が各学校の実情を踏まえながら，題材として扱う時期や時間数，生徒の実態などさまざまな観点から設定することが望ましいと考えています。このことから，今回の教科書では，「学びのねらい」については 3 観点に絞って示しています。

Q5 言語活動を促すためには？

A5「学びのねらい」の中に，言語活動の手がかりがあります。

「学びのねらい」の中には，美術科に求められている言語活動の手がかりがあります。形や色彩，そこから生成されるイメージなどを，表現したり，思考したり，コミュニケーションを図ったりする活動などから，言葉や造形の言語として捉えることができます。

個人における言語活動では，主題の明確化や，発想や構想の具体化，そして振り返りなどの自己評価を通して培うことができます。新版教科書では，生徒が作品について記した文章を「作者の言葉」として掲載しています。また他者との言語活動では，思いを伝え合ったり，話し合ったりする活動を通して，お互いの見方や感じ方，考え方を理解することなどから，双方向のコミュニケーション活動から学びの共有化を図ることができます。

生徒作品　春を運ぶ赤い鳥［アクリル・ペン・紙／54×38.7cm］
「寒い冬が続き，やっと暖かい春が来てうれしかった時の気持ちを表しました。鳥は花の精で，雪は溶けて水になり，春のカーテンが開こうとしています。」（作者の言葉）

『美術 2・3 下』p.11「想像の世界への飛翔」より

Q6 他教科・他領域との連携を図る活動はありますか？

A6 美術を通して自然との共生を理解する活動などがあります。

美術科は，以前から特別活動や総合的な学習の時間などにおいて，学校生活や行事を豊かにし，よりよいものにするために，学校全体に働きかける取り組みをしてきました。今後は他教科で学んだ知識や技能を美術の学習に生かして，他教科への興味や関心，意欲を高めることも考えられます。

例えば『美術 2・3 下』の「自然と共に生きる」（p.22-23）のように，新学習指導要領の第 2・3 学年「自然との共生などの視点から生活を美しく豊かにする美術の働きについて理解する」にあたる表現や鑑賞の学習では，環境問題（社会科），自然環境の保全（理科）などの学習を生かして，生徒の意欲関心を高めたり，発想や構想の手助けにしたりすることもできるでしょう。また，詩や物語から主題を発想する題材は国語科と，和菓子やおもちゃづくりの題材は家庭科と，木工や金工は技術科と連携することができます。

『美術 2・3 下』p.22-23
「自然と共に生きる」

美術の授業と教科書

さまざまな場面で活用できる美術の教科書を目指して

お茶の水女子大学附属中学校　小泉 薫

「美術の授業で教科書はどのように活用されているのだろうか？」

知識理解を中心とした教科のように授業で常に手元に置かれて活用される教科書と異なり，美術の教科書は授業の導入段階で活用される割合が高いのではないでしょうか。私自身，教科書編集に携わるまでは，作家の作品図版や生徒作品などを，生徒の興味関心や制作の意欲を高めるためや発想を引き出す一つの材料として，授業では鑑賞活動を始め，導入段階で多く活用していました。

そもそも教科書とはどのような位置づけなのでしょうか。教科書とは，「小学校，中学校，高等学校，中等教育学校及びこれらに準ずる学校において，教育課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として，教授の用に供せられる児童又は生徒用図書であつて，文部科学大臣の検定を経たもの又は文部科学省が著作の名義を有するもの」（教科書の発行に関する臨時措置法　第二条）とされています。

そして，学校教育法（教科用図書・教材）第 21 条では，「小学校においては，文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教育用図書を使用しなければならない」とあり，中学校でもこの規定を準用しているのです。つまり，すべての児童生徒は，教科書を教科の主たる教材として用いて学習する必要があるのです。

しかし現実の問題として，美術の教科書を授業の中で使ったことがないという美術科の先生の話を聞くことがあります。そのような先生方の話からは，「授業で使える題材がない」「時間数が少ない中で教科書に載っている題材をやろうと思うとそれだけで 1 学期が終わってしまう」というような題材についての問題や，「教科書とは同じ題材をやりたくない」「そもそも教科書は初めの授業で見ただけで使ったことがない」といった厳しい声まで聞こえてきます。

教科書編集の立場にいる私にとって，とても残念なことであると同時に，なぜ美術の教科書は授業の中で使ってもらえないのかを真摯に受け止め，新しい教科書づくりに生かしていかなければならないと強く感じていました。

確かにこれまでの美術の教科書は，教科の性格や特性を考えれば，他の教科と違って常にそばに置いて参照しながら活用する教科書ではなかったかもしれません。しかし，本当に使いたいと思える教科書であれば，もっと授業の中で身近に置いて，さまざまな場面で活用できる教科書になるはずです。

今回の教科書の 3 冊の構成は，生徒が美術の学習を通して個としての自分自身のアイデンティティーを確立していきながら，身の回りの生活に関わるさまざまな事柄や問題に目を向け，自分が住んでいる地域から社会，そして世界へと視野を広げ，自分を取り巻く自然や環境に視点を広げられるように，発達段階に応じた学びの広がりと高まりを目指したものとなっています。

新しい教科書の特徴としては，新学習指導要領に準拠していることはもちろんですが，いちばん大きく変わった点というのは，各ページとも学ばせたい事柄や獲得させるべき力が何であるかが読み取れる構成になったことではないでしょうか。これまでの教科書は，絵や彫刻といった表現手段による領域別に扱っていましたが，今回の教科書では学習主題（テーマ）を軸に置いた構成で示していくことによって，学習すべき内容をどのような方法や環境で学ばせ，目標を達成するのか，指導者である教師や，学習者である生徒によって，表現領域にこだわることなく主体的に選択ができるようになりました。それぞれのページで，学習主題を基にどのような題材へと広がりを持たせることができるのかがわかりやすく示されていると同時に，発想や構想の段階だけでなく活動のさまざまな場面で活用できる内容になっています。生徒が試行錯誤を繰り返しながら制作活動に取り組み，学んでいく中で，それまでの過程を振り返りながら再度目標を確認していく時にこそ，この教科書を使ってもらいたいのです。

教科書のページを開いた時に，美術の教科書でなければ見ることのできない生徒たちの輝く瞳をさらに輝かせるためにも，この新しい教科者がいつも手元に置かれて活用され，愛されるものとなることを願っています。

美術の授業と教科書

教科書の使い方のポイント

学びのねらい

「学びのねらい」は，生徒にとっての学習目標であると同時に，指導のねらいでもあります。これらは**「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」**の評価の 3 観点との関連を考えて，平易な文言で示しています。指導案などを作成する場合の評価の観点としても活用することができます。

各ページの主文

各ページのテーマに沿った学びの内容が，生徒たちの興味を広げるようなかたちで具体的に示されています。「学びのねらい」と関連づけることによって，**学習の目標**がはっきりと生徒に伝わるように工夫されています。また，形や色彩，イメージ，材料など，**[共通事項]** のキーワードも盛り込まれています。

POINT

各ページに示されている「POINT」は，生徒たちが表現や鑑賞の活動の中で，発想や構想をする場面での手がかりとなる**教師の働きかけ**を具体的に示してあります。アイデアが浮かばずに困っている生徒への声がけから，発展的な課題としての捉えまで，幅広く活用できるように工夫されています。

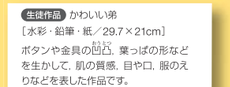
『美術 1』p.14-15「自然の表情」

制作のプロセス

今回の教科書では，完成作品だけでなく，**制作風景**や**アイデアスケッチ**，**ワークシート**などを増やすことで，制作のプロセスがわかりやすく示されています。したがって，導入段階だけでなく活動の流れの中で教科書を幅広く活用できるように工夫されています。

作者の言葉

「作者の言葉」や生徒作品の解説文によって，生徒の**発想や構想**など，具体的な活動の様子が見えるように工夫してあります。**言語活動**との関わりの点では，自分の感じ取ったことや考えたことを整理し，明確化する活動として位置づけることができます。



『美術 1』p.19「顔をつくる」より

p.45「いろいろな技法を用いて」より

関連ページへのリンク・コラム・巻末資料

関連ページを「参照」として示し，さまざまなページを横断して学習ができるように配慮しつつ，3 冊が有効に活用できるように工夫されています。また，各ページの発展的な内容や技法，表現や鑑賞の鑑賞活動を行う上での付加情報などは，コラムとして取り上げています。

「巻末資料」では，色彩学習や美術史年表に加え，技法の解説，デザイン史年表，写真撮影の基礎知識など，従来の教科書にはなかったさまざまな資料を盛り込むことで，教科書としての資料性を高めました。

『美術 2・3 上』p.32-33「転がる水」

特設ページ・造形ギャラリー

発展的な内容については，「特設ページ」として盛り込みました。美術の力がさまざまな場面で生かされています。また「造形ギャラリー」（p.40-41）は，小学校図画工作「造形図鑑」のページとの連携を図り，鑑賞ページとして位置づけています。

内容解説

個に軸を置く美術の学びとは

埼玉大学　教授　小澤 基弘

美術の表現は多様ですが，「個」の思いや思考がその出発点であるという点で，すべては共通しています。特にファインアートと呼ばれる絵画や彫刻の分野では，「個」，つまり自分自身をよりよく知ろうとする意欲や姿勢が，表現の質を決定することは言を俟ちません。

新しい教科書では，「個」への深いまなざしをテーマの一つに掲げ，そのまなざしの深化にしたがって表現が必然的に変化していく様を，紙面からはっきりと伝わるように工夫しています。例えば自画像表現については，従来型の表現から現代ならではの表現までを網羅的に示すことで，「個」へのまなざしのさまざまなヴァリエーションを示しました。

このように自分自身を深く探求していくことは，自己に狭小的に閉じこもることを意味しません。逆に，自分自身を深く知ることによって，他者の気持ちや感情を理解できるようになるでしょう。それがやがて社会に対する深い理解にもつながっていくと考えます。

今回の教科書では，「個の深い理解＝他者や社会の深い理解」という基本的な考え方に基づいて，すべての学年の第一章に「個」に軸を置く題材を配置しました。自分自身を見つめ，よりよく知ろうとする姿勢が，あらゆる美術表現の可能性をひらいていくという構成となっているのです。

『美術２・３上』p.6-7「私との対話」

A 表現（1）（3）・B 鑑賞

題材事例

15 の肖像

川越市立美術館　田中 晃

■題材のねらい

中学３年生は中学校の卒業学年であると同時に義務教育の卒業でもある。本題材では，人生の分岐ともなる 15 才の自分の姿や思いなどを，さまざまな視点から見つめる。そして，小学校図画工作科から続く９年間の集大成として，主体となる自己を客観的に見たり，別の形に置き換えてみたりするなどの活動を通して，発想や構想豊かに工夫して表現を行い，社会に生きる未来の自分を創造していくための力を養う。

■活動内容

第１に「私の不思議な世界」，第２に「自画像」，そして第３に「私のいるところ」という３つのプロセスを経て一つの作品がつくられていく。活動のプロセスでは，表現の幅を広げるために欠かせない「見る」活動の充実を意識して，常に鑑賞の活動と行き来しながら自己の世界を広げていく。

第１段階　「私の不思議な世界」

深層心理を探るシュルレアリスム，日常の意識を変換するトリックアートやスーパーリアリスムなどの作品鑑賞を中心に，アートの面白さや多様な表現を知る。その中から自分が表現したい手法を選択し，スクラッチによる白黒のシンプルな線描表現で作品を制作する。

第２段階　「自画像」

さまざまな自画像を鑑賞し，自分を表す上で欠かせない顔の「表情」に関心を持ったり，作品に込められた思いを感じ取ったりしながら自画像を描く。ただし，自分の顔を描く活動だけで完結する題材ではないため，自分らしい表情を写真に撮り，それをトレースして仕上げていく活動を短時間題材として行う。仕上げは，鉛筆，ペン，着彩など個々のアイデアを生かす。

『美術２・３上』p.7 より「つながる道」

第３段階　「私のいるところ」

B3 大のパネルにスクラッチの作品と自画像を組み合わせ，「今，自分がここにいる」という自分の存在を伝えるような世界を考えて，画面を構成する。テーマの設定および素材や技法などの表現手段は，美術を通して培ってきた力を存分に発揮させるようにする。そして，完成した作品に解説（キャプション）を添えて相互鑑賞を行い，互いの学びとする。

■振り返り・評価の手だてなど

本題材では生徒自身の自己評価活動が何より重要である。毎時間の振り返りで自分が表現する世界を言語化することにより，自己理解が深まるとともに美術の活動のねらいも理解されるようになる。この点を押さえつつ，表現の意図や工夫など評価の観点を挙げ，各段階での部分評価と題材全般を通してみた活動を総合的に評価する。また，最後に「自分と美術」などのテーマで活動を振り返ることも大切なまとめとなる。

身の回りや生活に関わる美術の学びとは

東京学芸大学　教授　鉄矢 悦朗

私たちはデザインされたモノに支えられて生活しています。しかし，「デザイン」という言葉が日本に定着する前から，先人たちは生活の工夫を重ねて道具をはじめさまざまなモノをつくってきました。つまり，デザインとは特別なものではなく，人類が生活していく中で積み重ねてきた工夫と密接につながっているのです。

中学生がデザインの学びを実感のあるものにするためには，目新しいデザインではなく，身の回りの物事から始めると取り組みやすいと思います。日常にある工夫に目を留め，特徴や美しさを味わい，デザインの背景を知ることは，自己肯定から地域の誇りにまでつながることでしょう。

「つくり手（職人，デザイナー，メーカーなど）」の意図は，素材選びや色や形に込められ，デザインになります。「つくり手たち」が使う人の気持ちになってデザインしたモノを，実際に手にして学ぶことはとても大切な体験です。その体験は，自分が制作をする場合に，使い手が必要としていることや与条件の整理からデザインを生み出していく視点を生じさせてくれます。そのようにして，「デザインとのつき合い方」を学ぶことができるのです。

『美術 1』p.20-21「使いやすさを求めて」

題材事例

ユニバーサルデザインを考える

富山大学人間発達科学部附属中学校　藪 陽介

■題材のねらい

本題材では，生活の中にあるものが目的を持ってデザインされているということを，自らの取材活動によって能動的に感じ取らせるようにしたい。

まず導入段階で，ユニバーサルデザインの７つの原則を明確にすることにより，ユニバーサルデザインの視点から取材活動や発表活動を行えるようにしたい。そして，自分が気づかなかった新たな価値を見出し，多様な見方や考え方を養うきっかけとして，自分が見つけたユニバーサルデザインの価値を十分に感じ取った上で相互鑑賞し，批評し合う活動に取り組ませたい。

鑑賞活動は，言語を介してコミュニケーションを図ることにより，より深いものとなる。共通のキーワードをもとに相互鑑賞させることで，感覚にたよりがちになる鑑賞の視点が明確になり，デザインの価値に根拠を持って語ることができるようになると考える。

本題材を通して，生活の中にあるものは，つくり手が目的をもってデザインしたものであることに気づかせ，それぞれのデザインの価値を理解させたい。また，自分の美意識を働かせて優れたデザインを選び，生活に取り入れ，生涯にわたり心豊かな生活を営む感覚・能力や態度を育成したい。

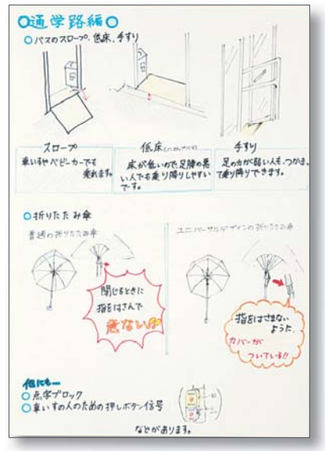
■活動内容

第１次　「UD を知る」

ユニバーサルデザインの原則について学ぶ。生活の中からユニバーサルデザインを探して発表し合い，友達が見つけたユニバーサルデザインを相互鑑賞する。

第２次　「UD をつくる」

生活の中で不便だと感じた事柄について，どのような形が不便さにつながっているのかを各自で考える。考えの似通った生徒別にグルーピングし，開発する対象を絞り込む。各自の案を持ち寄りグループとしての案にまとめ，不便さを解消する UD を開発する。全体でプレゼンテーション，相互評価を行い，話し合いの中で自分の考えが新たに広がったことなどについてワークシートを用いて自己評価をする。



『美術 1』p.21 より
「ユニバーサルデザインのレポート」

■振り返り・評価の手立てなど

第１次の鑑賞の場面では，ユニバーサルデザインの原則を視点に据えながら，そのよさについて気づいたり考えたりしているかを，発言やワークシートから評価したい。また，相互鑑賞における話し合い活動の中から，自分の視点だけでは気づかなかったよさを見つけさせたい。

第２次の構想の場面では，まず自分なりのアイディアを持った上で，グループ内の話し合いに臨ませたい。グループ内の話し合いの場面では，互いの考えを練り上げ，さらによいものとなるよう工夫しているか，観察や制作するプレゼンボードから評価したい。さらにプレゼンテーションの場面では，グループで開発したユニバーサルデザインのよさが効果的に伝わるように，プレゼンボードのまとめ方や発表の方法を工夫しているかという点から評価を行いたい。

社会や世界につながる美術の学びとは

京都造形芸術大学　教授　岡本 康明

中学校における「美術」は，作品の制作と鑑賞を通して，社会や世界と出会うことができる教科です。今日の美術を取り巻く状況を見ると，個人の内面の探求へと向かう美術作品の制作とともに，現代社会を見据え，溢れるモノや情報，他者との関係性などを強く意識した多様な表現活動があることに気づきます。学校現場においても，コンピュータを駆使したデジタルアートが制作される一方で，美術作家のワークショップに参加し，作品の生成過程や場を共有することで，その協同性から多くを学ぶ試みも見られるようになってきました。

新版教科書の４つのテーマのひとつである「社会や世界につながる美術」では，環境の問題やアジアの現代美術における多様な表現などを取り上げて，人とモノの関係や，人と社会との結びつきなどについて学ぶことができる内容になっています。こうしたテーマに基づく日々の授業では，例えば身の回りにある日用品や廃材など，生活の中にごく当たり前に見られるモノを材料として作品を制作することもあります。また，日本の伝統や文化を学ぶと同時に，美術館や博物館での作品鑑賞を通して，広くアジアや世界の美術にも触れ，さらに積極的な異文化交流を実践していくことで，新たな世界とつながって行くことを目指しています。

『美術２・３下』p.20-21「メッセージを表す」

題材事例

廃材アート
―廃材に新たな命を吹き込もう―

長野県長野市立櫻ヶ岡中学校　中平 千尋

■題材のねらい

現代の中学生はものにあふれた生活をしている一方で，エコやリサイクルという考え方も日常生活の中で浸透している。表現や鑑賞の活動を通して，日頃生徒たちが感じたり，抱いたりしている「社会へのメッセージ」を自由に伝えることができるような場面をつくり出したいと願い，「廃材」を素材として扱う本題材を設定した。

この題材には，もともとの「廃材」が持っている使い道や用途といった「既成のイメージを利用して表現する面白さ」と，「全く違ったイメージをつくり出す面白さ」の両面のよさを持っている。例えば廃材の色を変えてしまうだけで，全く別のイメージが創出されるなどの面白さがある。ゼロから全てつくり出さなければならない題材と違って，生徒にとって技能の面での抵抗感が低く，取り組みやすいのではないかと考えられる。また，中学生が比較的苦手であると考えられる「思い切った発想の飛躍」を学ばせたい。

■活動内容

①「廃材アート」という表現との出会い。廃材アート作品を鑑賞し，どのようなメッセージを感じるか発表する。また，どのような廃材でどのようなことができそうかというイメージを持つ。
②導入の短時間題材として，小さな廃材で遊ぶ活動を行う。
③実際に地域の廃材収集所へ行き，職員の方の話を聞き，廃材を調査する。
④自分で使いたい廃材を調達し，アイデアスケッチや試作を始める。
⑤アイデアが決まったら制作開始する。追加で必要な廃材があれば，廃材収集所へ再度行き，調達してくる。
⑥廃材収集所などに完成作品を展示し，作品の解説をする。

写真の作品「チャリンコモンスター」は，自転車好きな生徒が，廃棄されようとしている自転車の部品から発想して制作した。生徒は，自転車に動き回る龍のモンスターというイメージを持ち，金，赤，黒のカラースプレーでまだら模様に着色した。他の部品は，運転者自身が体に装填する武具として制作した。実際に廃材収集所へ出向き，本物の廃材と出会ったことにより生まれた作品だったと思う。

『美術２・３下』p.20 より「チャリンコモンスター」

■振り返り・評価の手立てなど

本題材が，廃材の種類を一つに絞って制作する題材と異なる点は，生徒自身が自分のメッセージややりたいことに合わせて廃材を選ぶということ，そこに生徒のメッセージが現れてくるということである。特に，既にあるものの使い方を変える，別のものに変える，組み合わせる，色を変える，質感を変える，もともとのもののイメージを生かす，逆に全く違ったイメージにするなどを，面白さを感じながら制作している姿（関心・意欲・態度，発想・構想の能力）を評価していきたい。今まで扱ったことのない素材を扱うために，道具などを工夫する（創造的な技能）必要が出てくるが，その場面が貴重な学習となる。なお，既成のイメージにとらわれてしまい，素材から発想することが難しい生徒には，主題材に入る前の短時間題材などにおいて楽しく廃材と関わり遊んでみる学習が必要になるだろう。

作品が完成したら，それを展示してお互いの作品を鑑賞したり，外部の方に見てもらったりするなど，コミュニケーションしながら観賞する場所をつくることも，重要な評価や振り返りの場面となる。

自然や生命，環境に関わる美術の学びとは

岡山大学　教授　泉谷 淑夫

はるか昔，電気などなかった時代の人々は，日が落ちると満天の星空を眺めて色々なことを想像しました。星々の位置や動きを観察して占星術を編み出したり，星々の連なる形から連想して星座やそれにまつわる物語を紡ぎ出したりと，その想像力には驚くばかりです。一方，科学が発達した時代に生きる私たちは，それらを知識として学ぶことはあっても，輝く星に感動することも，星々の形から何かを連想することもあまりありません。真夜中でもコンビニに煌々と明かりが灯る現代では，そもそも夜空を見上げること自体が珍しく，星々にまつわるロマンチックな話が語られるのは七夕の夜くらいでしょうか。

美術教育の危機が叫ばれる今日，美術の原点に返って，もう一度人間の想像力を掘り起こす努力が求められています。美術にはもともと「見えないものを見えるようにする力」があります。身近な自然から広大な宇宙や微生物の世界まで，目を凝らして観察し，目を閉じて想像することから，「私たちはこの広大な宇宙の中で生かされている」という素直な認識も生まれます。素直な気持ちで周囲との関係を見つめ直せば，忘れかけていた感覚や想像力がよみがえり，周囲の世界はきっと新鮮な輝きをもって語りかけてくるはずです。

このような美術の学びを通して，中学生が内面に豊かな世界を持ち，これからの人生のさまざまな局面に立ち向かってほしいという願いが，新版の教科書には込められています。

『美術２・３下』p.4-5「息づく生命を感じて」

題材事例

想像の動物の形を打ち出そう
—銅板レリーフ—

東京都武蔵野市立第六中学校　中村 みどり

『美術２・３下』p.5 より

■題材のねらい

①生活を豊かにする金工品のよさや美しさを知り，自らの発想や構想を生かして楽しく制作する。
②金属材料の特性を理解し，打ち出しや金属加工等を工夫して，創造活動の喜びを味わう。

今まで見たことのない新しい動物や生命の形をイメージさせ，生命感や身体の立体感を創意工夫して表現させるようにしたい。本題材は，主題や意図に合わせて自由にイメージをふくらませて形をつくり出す楽しさを味合わせるものである。自らのイメージを基に創意工夫して制作することで，創造活動の原点を体験させ，自己実現する喜びを味合わせたい。

さらに，金属という抵抗感の強い材料を扱うことで，中学生としてより高度で力強い造形活動を体験させ，達成感を持たせたい。材料の特性を生かす思考や判断，立体感を表すための方法を創意工夫させて創造的な技能を高めることも，題材のねらいの一つである。また，金属を素材とする工芸品を鑑賞して，伝統的な工芸品についての知識や理解を深める機会とし，そのよさや美しさを味合わせたい。

■活動内容

①資料やスケッチを基に，動物の特徴を生かし，想像力を働かせて新しい動物や生命のイメージを考える。想像した動物は，身体のふくらみや丸みを生かして，生き生きとした生命力を感じられるようなデザインを発想・構想する。想像した動物の名前を考えたり，動きや習性などの特徴も想像したりして，イメージを豊かに広げる。
②銅板とほぼ同じ大きさのアイデアスケッチ（本題材では A4 を使用）を描いてイメージを具体化する。その際，余りの銅板を捨てるような材料の無駄が出ないように，なるべく余白を残さないようにして描く。打ち出しの作業を想定して，動物の身体の細かな模様は，最低 1cm 以上の幅を空けて表すようにする。
③輪郭線に沿って，針打ちたがねで規則正しく隙間を空けないように打ち，砂袋や油土の上で裏側からいもづちで打ち出す。その際，動物の生き生きとした感じや身体のふくらみを意識する。
④銅板の表側から輪郭線に沿ってたがねで打ち直して形を整えたり，裏側に油土をつめ，細部のふくらみを打ち出したりして，イメージした動物の形に近づける。
⑤背景を切り取り，打ち目をつけたり磨いたりして，立体感を表す。

■評価の手だてなど

想像した動物を基に表現することに関心を持ち，主体的に主題を生み出し，材料や用具の特性を生かして表現している。鑑賞では，作品に関心を持って主体的に見方や理解を深めようとしている。（関心・意欲・態度）

想像力を働かせて，生命感や立体感を感じさせるような独自な動物の形やイメージを発想し，単純化や強調などを考え，心豊かな表現の構想を練っている。（発想・構想の能力）

銅板や用具，打ち出しの方法の特性を生かして，想像した動物の形や生き生きとした感じを表すために創意工夫して表現し，打ち出しの工程や順序も総合的に考えて表現している。（創造的な技能）

感性や想像力を働かせて，形の特徴や印象などから造形的なよさや美しさ，作者の意図を感じ取り，自分の価値意識を持って味わっている。（鑑賞の能力）

教師用
指導書の
ご案内

日文の「教師用指導書」ラインナップ

日文の教師用指導書は，先生方の美術の授業を丁寧にサポートします。

新しい学習指導要領が完全に実施されることとなり，評価についても新たな方向性が打ち出されました。日文の「教師用指導書」は，先生方が新しい教科書で授業をする際の悩みや質問に丁寧に応えられるよう，内容や構成を工夫しました。また，中学生が学びを広げ深めていけるように，先生方をさまざまな角度からサポートします。

教科書の紙面で展開する内容を詳しく解説

授業のポイント編

教科書紙面の縮刷をもとに，その内容について詳しく解説します。巻末には，美術用語事典と作家解説を掲載する予定です。また，先生方が授業中に違和感なくお使いいただけるよう，表紙を教科書と同じデザインにしました。

生徒の表現と鑑賞の活動を魅力的にコーディネート

掲示用大型資料（掛図）

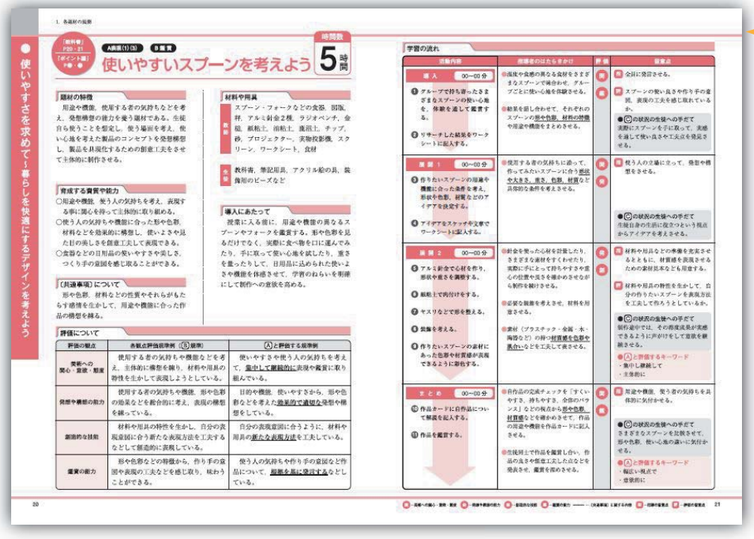
日文の中学校美術の掛図では，表現活動における技法や制作手順を確認するための資料と，魅力的な鑑賞活動を実現するための大型鑑賞用資料があります。いずれも教室にいる全員が一同に見ることができるということを考慮した大型資料です。

上は平成18年度用「教師用指導書」の掛図です。

生徒の発想を引き出し，活動を記録する

ワークシート集

教科書題材に準拠したワークシートを汎用性のある形式で用意します。先生方が自由にカスタマイズしてご利用いただけるよう，デジタルデータでも提供します。



鑑賞授業の幅が広がる使いやすさを追求

鑑賞画

鑑賞画は，教科書に掲載した作家作品や関連作品を用意する予定です。教室に掲示してみんなで鑑賞できる大型鑑賞画と，生徒が手元で鑑賞できる A4 サイズの鑑賞画を組み合わせて提供する予定です。

学校の情報化と学びの広がり，深まりを見据えて

教科書完全準拠「デジタル教材」（提示型）

作家シリーズ映像教材（DVD）

教科書の内容に準拠したさまざまなデジタル教材を，教師用の提示型資料として開発しています。教科書に掲載した作家作品を電子黒板やプロジェクタで大きく提示したり，表現題材の制作プロセスや留意点などを生徒に映像やスライドショーなどで提示することを実現します。
また，授業の導入でお使いいただける，作家をテーマとした映像教材も制作しています。乞うご期待下さい。

上はデジタル教材のイメージです。

題材の授業展開と評価のポイントがよく分かる

授業の指導編

教科書で紹介している主な題材の詳しい授業展開例集です。授業の具体的な展開はもちろんのこと，〔共通事項〕についての押さえや，評価のポイントについて分かりやすく示す工夫を凝らしています。

日文「美術」の教科書は拡大版を発行します。

みんなに美術を好きになって欲しいという願いから，日文の中学校美術の教科書では，平成 22 年度用から拡大版を発行しています。新しい教科書も拡大版を発行します。

右サンプルは平成 22 年度用『美術１』p.10 の紙面です。

平成 24 年度用　新版「美術」　題材一覧

章	テーマ（学びのキーワード）	頁	A 表現（1）	A 表現（2）	A 表現（3）	B 鑑賞
オリエンテーション	美術との出会い	2・3				■
序	感じる心があるから…	4 - 7				■
Ⅰ みる・感じる・つくる	感じたことをそのままに	8・9	●●		◆◆	■■
	いろいろなスケッチ	10・11	●	●	◆	■
	自然の形や色	12・13	●	●	◆	■
	自然の表情	14・15	●●		◆◆	■■
	小さな生命を見つめて	16・17	●●		◆◆	■■
	顔をつくる	18・19	●●		◆◆	■■
Ⅱ 生きる豊かさ・伝え合う楽しさ	使いやすさを求めて	20・21		●	◆	■
	遊び心	22・23		●	◆	■
	文字や形で伝える	24・25		●●	◆◆	■■
	楽しく伝える	26・27		●●	◆◆	■■
	手でつくる心	28・29		●	◆	■
	土と炎の造形	30・31	●	●	◆	■
特設ページ	美術館へ行ってみよう！	32・33				■
Ⅲ 世界の広がり・歴史の奥行き	残された造形	34・35	●		◆	■ ■
	「和風」を味わう	36・37		●●	◆◆	■■ ■
	アジアの多様な美術	38・39	●		◆	■ ■
	光の美しさを求めて	40・41	●		◆	■
巻末資料	色を学ぶ／色の性質／日本の色づかい	42 - 44				■
	いろいろな技法を用いて	45	●		◆	■
造形ギャラリー	環境を演出するアートたち	46・47				■

章	テーマ（学びのキーワード）	頁	A 表現（1）	A 表現（2）	A 表現（3）	B 鑑賞
オリエンテーション	生活の中に生きる美術	2・3				■
Ⅰ「つながり」のかたち	身近な人を見つめて	4・5	●●		◆◆	■■
	私との対話	6・7	●		◆	■
	投影された私	8・9	●●		◆◆	■■
	風景に思いを込めて	10・11	●●		◆◆	■■
	思いを立体で	12・13	●		◆	■
Ⅱ「生きる」かたち	装いを楽しむ	14・15		●●	◆◆	■■
	生活を彩るデザイン	16・17		●	◆	■ ■
	手でつくる楽しみ	18 - 21		●	◆	■
	日本の美意識	22 - 25		●	◆	■ ■
	墨が生み出す豊かな世界	26・27	●		◆	■
	心触れ合う場	28・29		●	◆	■
	心に響く形や色	30・31		●●	◆◆	■■ ■
特設ページ	転がる水	32・33				■
Ⅲ「伝え合う」かたち	わかりやすく伝えるデザイン	34・35		●●	◆◆	■■ ■
	「伝える」をつくる	36・37		●●	◆◆	■■
	「まとめる」方法と工夫	38・39		●●	◆◆	■■
	個性が響き合う造形	40・41		●	◆	■
巻末資料	写真撮影の第一歩	42				■
	時代の流れの中で変化するデザイン	43・44				■
	木工の技法・水墨画の技法	45	●	●	◆◆	■■
造形ギャラリー	受けつぎつくる人の姿	46・47				■

章	テーマ（学びのキーワード）	頁	A 表現（1）	A 表現（2）	A 表現（3）	B 鑑賞
オリエンテーション	社会へ広がる美術	2・3				■
Ⅰ イメージの力	息づく生命を感じて	4・5	●●		◆◆	■■
	あふれ出る躍動感	6・7	●●		◆◆	■■
	イメージの変容	8・9	●●		◆◆	■■
	想像の世界への飛翔	10・11	●●		◆◆	■■
	だまされる楽しさ	12・13	●		◆	■
	版表現の豊かさ	14・15	●		◆	■
	新鮮な見方で	16・17	●		◆	■
Ⅱ 社会の中で	平和への願い	18・19	●	●●	◆◆	■■
	メッセージを表す	20・21	●	●●	◆◆	■■ ■
	自然と共に生きる	22・23		●	◆	■
	感動の共有	24・25		●	◆	■
	街の中に息づくアート	26・27	●●		◆◆	■■
	空間の演出	28・29		●	◆	■ ■
特設ページ	アート・イベントに出かけよう！	30・31				■
Ⅲ 文化 受けつぎ・つくる	祈りの形	32・33	●		◆	■ ■
	世界を魅了したきらめき	34・35		●●	◆◆	■■ ■
	アジアの新しい風	36・37	●		◆	■ ■
	受けつがれる形	38・39		●●	◆◆	■■
	文化遺産を守る	40・41				■
巻末資料	金属でつくる	42		●	◆	■
	日本美術の展開と世界との交流	43 - 45				■
造形ギャラリー	「ゲルニカ」は語る	46・47	●		◆	■

●◆■＝描く活動　●◆■＝つくる活動　■＝鑑賞単独の活動

Information

平成 23 年度
全国図画工作・美術教育研究大会 IN 北海道

大 会 テ ー マ：**“わたし”を創る ～自立と共生の造形教育をめざして～**

授業実践テーマ：**「あったかい！」をつなげ合う造形活動**

日　程：平成 23 年 7 月 26 日（火）～ 28 日（木）

会　場：26 日（火）　ホテル・ライフォート　さっぽろ

27 日（水）　札幌市立幌西小学校・札幌市立円山小学校

28 日（木）　札幌市民ホール

主　催：全国造形教育連盟　日本美術教育連盟　共同開催

お問い合わせ先：札幌市立旭小学校
稲實　順（北海道造形教育連盟事務局長）
TEL: 011-811-4148　FAX:011-811-1382
北海道造形教育連盟 HP: http://hokuzou.kir.jp/

	会場	午前				午後			
第 1 日目 26 日（火）	ホテル・ライフォート さっぽろ	諸会議			昼食	校種別部会・全国代議員会 など			共同開催会議
第 2 日目 27 日（水）	札幌市立幌西小学校 札幌市立円山小学校	受付 授業解説	公開授業	授業 分科会	昼食	移動	実践発表および分科会	移動	交流 レセプション
第 3 日目 28 日（木）	札幌市民ホール	前日授業 プレゼンテーション		全体会	閉会式	オプションツアー（予定）			